

報告タイトル	「満洲国」文学についてフィールドワークの成果報告
報告者所属名	国際日本研究専攻
報告者氏名	梅 定娥
1、「満洲国」における古丁関係の遺跡の訪問 「満洲国」国務院遺跡をはじめ、「満洲国」時代の近代的な建物を訪ねた。また、新京ペスト騒ぎの時、古丁一家が住んでいた家の所在地(家自体もなくなった)と芸文書房遺跡をも訪れた。(古丁の家といわれるところの道路の向こう側にある二階建ての建物は芸文書房といわれる。) 「満洲国」国務院：国務院は「満洲国」の実権の中枢であった。その一階に統計処があり、そこに古丁が9年間も勤務していた。現在吉林大学医学部の実験楼となっている。 2、関係者インタビュー ①「満洲国」で活躍していた文学者李民氏と李正中氏 李民氏、90歳。日本留学歴をもち、古丁と同じ「芸文志派」の同人である。翻訳者、脚本家として活躍していた。後華北に亡命した。現詩人、『易経』などの研究者。 李正中氏、87歳。「満洲国」長春地方検察庁の検察官で、「芸文志派」と対立する「文選派」のメンバー。書道家、詩人。妻の朱媿氏は「満洲国」の有名な女性作家。 ②古丁の息子徐徹氏：古丁の長男、元遼寧省古籍出版社社長。現在西太后と張作霖の研究者として有名。徐徹氏への訪問をきっかけに古丁の右派とされた理由と経緯が大体明らかにした。 ③「満洲国」を研究する学者呂元明氏：元東北師範大学教授、「満洲国」研究の先駆者。そして、中国東北地区文学の研究者李春燕氏に電話インタビューも行なった。 3、古丁著作一次資料及び他の文学資料の調査 各図書館で古丁著書の一次資料を調査する。今回の調査成果としてあげられるのは古丁訳石川啄木著『悲しき玩具』と同じく古丁訳中島健蔵著『学生と社会』の単行本と、山田清三郎著『満洲文化建設論』である。 4、調査後の感想 ①歴史人物を研究する時、歴史環境の中で研究しなければならない。歴史環境を知る方法として、史料を調べと地元のフィールドワークが有効と思われる。 ②複雑そうな人物を研究する場合、その仲間の行動と意見も必要であるが、その対立面に立った人の意見も欠かせない。 ③総合研究大学院大学文化科学研究科スチューデントイニシアティブ実践教育プログラムのご援助があるからこそこのフィールドワークをやり遂げた。深く感謝している。	